



小池洋一・子安昭子・田村梨花 編  
『ブラジルの社会思想史  
—人間性と共生の知を求めて』

現代企画室 2023年 viii + 501 ページ

ISBN 978-4773822120

本書は、編者の3名を含む総勢21名ものブラジル研究者や専門家が、ブラジルの社会思想を紹介することを目的として著した書である。編者は冒頭において、混沌の中にあり未来を見通すことが容易ではない我々の社会にとって、多くの問題や困難を理解し克服するためには、先達たちの社会思想や理論が多くの上諭を与えてくれると主張する。またブラジルは、日本において後進性をもって語られることが多いが、豊饒な社会思想や多方面での先進的な試みを多く有していると指摘する。そして、ブラジルの思想家たちが共通して「人間性と共生の知を求めて」きたと考え、本書の副題とするとともに、このような知の追求が現代の世界で著しく軽視されていると警鐘を鳴らす。

「はしがき」と序章で始まる本書は、4つの部に大別した合計20の章を中心に、同じく20ものコラムを掲載している。巻末にはブラジルの略年表に加え、本書で取り上げた思想家たちの生没年見取図が掲載されている。「第I部 社会を解剖する」「第II部 低開発と闘う」「第III部 社会運動を率いる」「第IV部 多文化を編む」という4つの部の構成は、編者が説明するように便宜的なものであり、それぞれの思想は各分類を超越した普遍的なものだといえる。実際に本書を読むと、少なからぬ思想家が、本書の異なる部で紹介されている思想家と交流し、思想的に影響し合っていることを理解できる。各章に関しては、それぞれ重点は異なるが、第一に生い立ち、時代や社会の状況、思想形成などをまとめ、第二に取り上げる思想自体について解説し、第三に現在における意義や課題を述べるような構成となっている。また、各章の最後にある「読書案内」では、その章に関する参考文献について解説を付して紹介している。

編者は「本書が紹介するブラジルの社会思想や思想家はほんの一部に過ぎ」ず、ほかにも候補が挙がっていたと述べている。ただし、候補を含めた本書の社会思想や思想家はほとんどが中道から左派となっている。近年のブラジルでは右派や保守が顕著化しており、それらの思想や思想家を取り上げることで社会の全体像が見えてくるのではと、ブラジル研究者として感想を抱いた。それとともに、本書で得られる人間性と共生の知をもとに、コロナ禍やウクライナ戦争などの影響もあり以前より衰弱した公共空間を追求できるのでは、という希望を一読者として抱いた。

近田亮平 (こなた・りょうへい / アジア経済研究所)